修士論文（要旨）
2022 年 1 月

スマートフォンによる文字入力が
非漢字圏初級学習者の作文に与える影響について
―手書きとの比較―

指導　茶谷　恭代　准教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
220J3011
多田　真由美

Master’s Thesis(Abstract)
January 2022

The Effects of Using Smartphone Character Input on Compositions by Elementary Level Learners from Non-Kanji Backgrounds : A Comparison with Handwriting

Mayumi Tada
220J3011
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yasuyo Chatani

目次

第１章　はじめに……1
1.1　背景 ……1
1.2　先行研究 ……1
1.3　研究の目的 ……3
第２章　調査の概要……4
2.1　調査対象者…… 4
2.2　調査方法 ……4
第３章　事前アンケート……4
3.1　調査内容 ……4
3.2　結果 ……5
3.3　結果の考察 ……9
第４章　作文課題 ……11
4.1　調査方法……11
4.2　作文の量への影響……11
4.3　作文の質への影響……15
第５章　事後アンケート ……18
5.1　調査内容……18
5.2　結果……18
5.3　結果の考察……21
第６章　学習者別　作文の量と質への影響 ……22
6.1　学習者別の作文の量への影響……22
6.2　学習者別の作文の質への影響. ……23
6.3　結果の考察……25
第７章　本研究の結論 ……28
7.1　本研究で得られた結果のまとめ……28
7.2　日本語教育への提案……29
7.3　今後の課題……30
参考文献

近年、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の普及により、文字を手で書く機会が減っているが、日本語教育の現場では書くことが習ったことを定着させる方法として優れていると考えられ、学習者に手で文字を書かせる機会が多い。しかし、文字や単語の練習としては熱心に書いても、短作文や作文となると書くことに強い抵抗感を示す学習者が少なくない。これは、初級段階で習ったことを定着させる方法として「書くこと」は有効であると考えられているが、作文となると書く内容や表現を考え、さらに、文字を手書きすることを求められるため、特に漢字の読み・書き・語彙力が学習困難点とされる非漢字圏学習者にとっては負担が大きすぎるためであると考えられる。

これまでの研究では、文字を書く方法は文章産出過程に大きく影響を与えることが指摘されているが、学習障害や身体的な障害のある児童、JSL の作文の支援という枠組みで扱われることが多く、日本語学習者を対象に文字を書く方法の違いによる影響を調べた研究は少ない。

手書き以外の方法を用い、日本語学習者の意欲、漢字産出への影響について調べた研究には坪根・鈴木(1997)、中原・岩下(2019)がある。坪根・鈴木(1997)は電子メールを利用した作文指導において、電子メールの利用経験のない学生からは大変だったという意見があったが、電子メールの利用経験のある学生からは漢字を思い出すのに役立った、繰り返し読んだなど肯定的な意見が得られている。また、中原・岩下(2019)は、中級以上の学習者にタイピングと筆記で既習漢字語彙を再生する実験的調査を行い、非漢字圏学習者は手書きによる漢字産出は正答率 34%程度、タイピングによる漢字産出は約 84%であったという結果を得ている。中原・岩下(2019)はこの結果から、非漢字圏学習者は漢字圏学習者に比べて漢字学習は苦手とすると考えられているが、それは手書きを目的とする場合であり、漢字産出方法をタイピングにした場合はその限りではないと考察している。

これらの先行研究は、学習者がキーボードによる文字入力を利用すると、文字を書くことに対する負担が減らせる可能性を示唆している。しかし、これらは作文における書く方法の違いに対する意識と、漢字語彙の産出における書く方法の違いによる正答率をそれぞれ比較したものであり、手書きの作文と文字入力による作文の質と学習者の意識の違いを直接的に比較したものではない。

よって、本研究では学習者の作文に対する意識と作文を書く方法に着目した研究の必要性を考え、(1)学習者の第一言語と第二言語の作文に対する意識、(2)文字入力を利用した場合の学習者の作文に対する意識の変化、(3)文字入力を利用すると、作文の量的な面、質的な面にどのような影響があるのか、という３点を明らかにすることを目的とし、非漢字圏の初級学習者を対象に作文に対する意識調査、手書きと文字入力による作文課題、手書きと文字入力に対する意識調査を行った。

その結果、本研究の調査対象者の学習者においては、(1) 日本語の作文に抵抗感を示す学習者は母語での作文にも否定的な意識を持っている傾向がある (2) 文字入力によって文字を書く負担が軽減し、作文が上手に書けたと感じた場合、文字入力の利用を肯定的に捉える学習者がいる一方、作文は文字の練習に有効であると考え、文字入力の利用に消極的な学習者がいる、(3) 文字入力によって作文の情報量は増えるが、内容のわかりやすさや表現の豊かさ、正確さには影響しない。ただし、漢字の使用量や表記の正確さは高まる傾向がある、ということがわかった。

本研究の調査対象者の人数は６名と限られた人数であったが、非漢字圏の初級学習者といっても日本語能力や作文に対する意識、文字入力が作文に与える影響は多様であり、日本語教育の教室においても学習者の状況は多様であることが示唆された。この結果を踏まえると、初級学習者の作文指導の際には日本語の言語的知識の指導と共に作文そのものに興味を持たせる工夫が必要である可能性がある。また、作文に文字入力を取り入れる際には、文字入力を利用する前に内容や構成を考える十分な時間の設定が必要であり、学習者の日本語能力やビリーフに合わせて手書きも文字入力も選択可能とすることも必要であろう。また、文字入力の利点を利用できる程度に日本語の言語知識が定着しているか、編集機能が使いこなせるかなどの見極めも大切であり、不足している場合には指導、練習も必要であると考えられる。

参考文献

Berninger,V.W.,Fuller,F.& Whitaker,D.(1996)A Process Model of Writing Development Across the Life Span.Educational Psychology Review,8(3),193-218

Hayes,J.R.& L.S.Flower.(1980)Indentifying the organization of writing processes,In Gregg,L.&E.Steinberg.(eds.),Cognitive processes in writing.Lawrence Associates,Publishers

Hayes,J.R.(2012)Modeloing and Remodeling Writing.Written Communication,29(3), 369-388

Kobayashi, H., & Rinnertc C.(1992)Effects of first language on second language writing: Translation versus direct composition. Language Learning, 42(2),183-215

Kyle Perkins(1983) On the Use of Composition Scoring Techniques, Objective Measures, and Objective Tests to Evaluate ESL Writing Ability, TESOL Quarterly,17(4),651-671

Uzawa,K.,&Cumming.,A.(1989)Writing Strategies in Japanese as a foreign Language:Lowering or keeping up the standards. Canadian Modern Language Review, 46(1),178-194

阿部新(2013)「スペイン・マドリードの大学における日本語学習者の言語学習ビリーフ」『明海日本語』18 増刊,pp.25-62

石田敏子(1986)「英語・中国語・韓国語圏別日本語力の分析」『日本語教育』58 号, pp.162-19

石田敏子(1996)「非漢字系日本語学習者の作文力の伸びの分析　電子メールを利用した日本語作文通信教育のための基礎的研究」『第５回小出記念日本語教育研究会論文集』,pp.29-45

石橋玲子(2002)「第２言語習得における第１言語の関与-日本語学習者の作文産出から-」風間書房

石毛順子(2012)「第二言語習得における作文教育の意義と特殊性」風間書房

岩崎浩与司(2020)「日本語教育におけるスマートフォンの活用-外国人留学生を対象としたメディアクラスの事例から-」『e-Learning 教育学会』14 巻,pp.15-23

大塚薫・林翠芳(2010)「中上級レベルの日本語学習者の作文教育-意見文に見る語彙・漢字使用及び誤用の分析結果を踏まえて-」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』4 号,pp.47-66

小笠原哲史(2018)「書きにつまずきのある児童の作文に関する検討-作文量と作文の誤りの比較-」『明星大学発達支援研究センター紀要』No.3,pp.31-42

衣川隆夫(2000)「日本語を第二言語とする書き手の文章産出研究の枠組みの提案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15 号,pp.13-24

小宮千鶴子(1992)「日本語教育における初級段階の作文指導」『中央学院大学教養論叢』4(2), pp.49-69

新海晃・澤隆史(2019)「聴覚障害児の文章産出プロセスに関する研究の展望

―文章産出における認知過程モデルと作文方略に関する研究を中心に―」
『東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ』70 号, pp. 429-440
鈴木一史(2019)「作文語彙と学習成績の関連性からわかる語彙力の諸相」
『茨城大学教育学部紀要（教育科学)』68 号, pp. 1-12
田澤実(2017)「特別な教育的ニーズのある児童および生徒に対する ICT を活用した
学習活動の支援」『法政大学教職課程年報』15(臨増), pp. 9-13
田代桜子・築地伸美(2015)「日本での就職を目指す日本語初級レベル非漢字圏理系院生
対象クラスにおける日本語産出活動の試み」『日本語教育方法研究会誌
vol. 25 No. 2, pp. 122-123
田中信之・北直美(1996)「日本語教育における学習者の作文に対する学習信念」
『北陸大学　紀要』20 号, pp. 325-334
谷口征子(2015)「JSL 児童生徒を対象にしたインフォーマルラーニング-ICT 活用による
書く力を育成するための一提案-」『教科開発学論集』３号, pp. 169-174
坪根由香里・鈴木庸子(1997)「中級の作文教育―意識調査、ワープロ・電子メール利用と
作文の分析を通して考える―」『ICU 日本語教育研究センター紀要』6 号, pp. 43-59
中原郷子・岩下真澄(2019)「日本語学習者における日本語漢字名詞産出時の出力形式の
影響―漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較―」『長崎外大論叢』23 号, pp. 43-51
日本語記述文法研究会(2008)「現代日本語文法６　第 11 部　復文」くろしお出版
長谷川哲子(2015)「留学生のライティングに対するビリーフ調査作成に向けて」
『エクス ： 言語文化論集』9, pp. 131-144
原沢伊都夫(2012)「日本語初中級学習者の作文指導-学習者の誤用分析をもとに-」
『静岡大学国際交流センター紀要』6, pp. 79-92
梁井久江(2018)「作文嫌いはなくせるか？-学部２年次留学生に対するアカデミック・
ライティングの実践-」『語学教育研究論叢』35 巻, pp. 113-135
姫野昌子(1980)「文章表現の指導」『日本語教育』43 号, pp. 1-16
姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・小宮千鶴子（1998)『ここからはじまる日本語教育』
「７章書くことの指導法（小宮千鶴子執筆)」ひつじ書房
藤本陽子(2019)「スマートフォンを利用した日本語学習の可能性-語彙学習の実践から-」
『至誠館大学研究紀要』6 巻, pp. 85-94
松田真希子(2005)「現職日本語教師のビリーフに関する質的研究」『長岡技術科学大学
言語・人文科学論集』19, pp. 215-240
山川真由・藤木大介(2015)「文章産出における心的表象の変化過程モデルに基づいた文章
産出方略研究の展望」『読書科学』第 56 巻　第３・４号, pp. 124-137
山本菜穂子(2012)「第二言語の作文に対する日本語学習者の意識―作文意欲を高める
効果的な作文指導をめざして―」『南山大学国際教育センター紀要』13 号, pp. 37-48